

自然誌 だじり 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 111号

2017年 3月

田中川干潟のハマボウ



写真1 1；3本目のハマボウ（2013年7月31日），2；田中川干潟の清掃活動（2017年2月25日），3；アイアシ群落の中で見つかった4本目のハマボウ（2017年2月25日），4；ハマボウ樹冠下の双葉苗（2006年7月27日），5；今村隆一氏（左）と岡与一氏，2本目のハマボウ前にて（2008年9月14日，締次美穂氏・撮影）

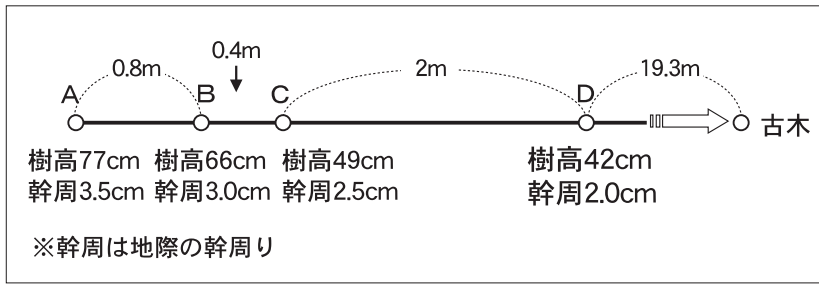


図1 2008年に計測した4本のハマボウ若木（現存はDのみ）

ハマボウ *Hibiscus hamabo* は干潟に自生する塩生植物で、三重県レッドデータブック2015では絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に選定し、生育地保護の必要を訴えている。田中川干潟（津市河芸町）のハマボウについては、本誌69号で締次（2006）

が2本のハマボウ成木の自生を報告している。あれから10年となる田中川干潟のハマボウに関して、その今昔をお知らせしたい。

2013年には、干潟の南端部で3本目のハマボウが開花しているのを見つけた（写真1-1）。毎年何度も足を運び、堤防道路からも見下ろせて観察しやすい場所である。それなのに開花を見るまで、この木の存在にまったく気付かなかった。干潟南端部は田中川干潟の最奥に位置している。

3本目の自生地は比較的漂着物が少ない場所であるが、田中川干潟では伊勢湾からの漂着物や不法投棄による粗大ごみが絶えない。4年程前から年2～3回の清掃活動がNPO「海の達人」や漁港関係者、親子連れなどのボランティアによって行われ、回収されたゴミはすべて産業廃棄物として処理されている（写真1-2）。筆者は、当初からこの活動に参加しているが、2017年2月に実施された清掃活動中、干潟内に4本目となる樹高152cmのハマボウの生育をアイアシ群落の中で確認した（写真1-3）。正確に言えば、再確認である。初認は2008年で、三重県立博物館主催の干潟観察会（5月18日）において、博物館サポートスタッフの協力を得て、樹高等が計測されている（図1）。当時の樹高は42cm、地際の幹周は2.0cmで、古木のハマボウまでの距離は19.3mであった。当時は、この若木の他にさらに3本の若木が生育していたのだが、姿はなかった。

また、締次（2006）は2本のハマボウ樹冠下などに約1000株の双葉苗（写真1-4）を確認しているが、2017年現在、1株も生き残っていなかった。ハマボウ樹冠下に芽生えた双葉苗は、日陰では枯死してしまうのであろう。また、潮や風の勢いに動き回る流木はたびたびヨシ群落をもなぎ倒していく。ハマボウの幼苗もその影響を大きく受けていると思われる。

2008年秋には、人気を博した博物館主催の干潟観察会の2回目が開催された。当時、観察会担当学芸員は今村隆一氏、ハマボウの解説はサポートスタッフをしておられた岡与一氏があたられ、その時のスナップを締次美穂氏が撮影されていた（写真1-5）。写真には、岡氏が自作の「ハマボウノート」を見ながら説明し、その横には今村氏が寄り添っている姿が写っている。お二人とも故人となられた今、感慨深いものがある。同年暮れに、落葉したハマボウの枝にヒメアシハラガニの死骸を見つけた（写真2）。モズのはやにえである。カニのはやにえは珍しいようで、兵庫県の伊丹市昆虫館が2014年度に開催した「モズのはやにえ」展で紹介された。

2017年現在、田中川干潟には4本のハマボウ開花株が育っている。いつの日か、5本目の株が大きく育っているのを発見することができるかもと、心ときめかせている。最後に、写真を提供していただいた締次美穂氏に感謝する。

〈篠木善重：津市河芸町中別保2230-1〉



写真2 モズのはやにえ、ハマボウの枝に刺さったヒメアシハラガニ。2008年12月23日

今風モズの速贄

浅名正昌

伊賀市上友生地区の田には、獣害防止用の網目一辺10cmの金網や化繊網が設置されている(写真-1)。その金網を結合している高さ180cmの支柱には、結束用の穴が最上端部と下方へ30・40cm間隔で4か所に開けられている。その穴には結束に使った針金が縛った状態で残っており、その所々の針金にモズが速贄をつくっている。かつて見られた速贄は、木の枝先などの自然物を利用したものだったが(写真-2)、最近では獣害防止用の人工物をうまく利用している。

金網の結束に使用した針金は細いが撓ることはない。トンボやバッタを貫くには最高の素材である。しかも、太さが一定のため、軟体の細長い体の中心を貫くにも最適な素材である(写真-3)。また、モズが餌を突き刺すのに代用した止まり木は、支柱の上端(高さ180cm)と金網を重ね合わせた「く」の字状に出っ張った金網部である(高さ140cm)。

そのため、速贄は高さ180cm~200cmと140cm~150cmの間に集中し、前者にはコオイムシやコオロギ類、カエル類などが(写真-4~6)、後者にはケラやツチイナゴ、アカネ類などが刺さっていた(写真-7~9)。

そして、日時の経過と共にそのほとんどが食べられていたが、高さ1m以下の針金には小型のガ類の幼虫等が速贄され、その多くは食べられずに残っていた。また、近くの市道沿いの金網にも50cmほどの高さのところ

にやや大きいショウリョウバッタとカエル類の速贄があったが、食べられずに残されていた。このように、低い位置での速贄は残されることが多いが、高所の速贄は大小に係わらず食べられる確率は常に高い。

写真 1 ; 観察地,
2 ; バッタ類(コバネイナゴ?), 3 ; ガ類の幼虫, 4 ; コオイムシ, 5 ; コオロギ類(エンマコオロギ?), 6 ; カエル類(ツチガエル?), 7 ; ケラ, 8 ; ツチイナゴ, 9 ; アカネ類(アキアカネ?)



(あさな まさよし : 伊賀市緑ヶ丘西町2424-11)

バイカモの三重県内再発見

榊 田 知 穂

バイカモ *Ranunculus nipponicus* は、キンポウゲ科に属する多年草で、浅くてきれいな流水中に生育し、日本特産で北海道と本州に普通に分布するとされている（佐竹義輔ら1999；日本の野生植物草本Ⅱ，平凡社）。しかし、三重県においては桑名市でかつて生育したことが記録されているだけであり、三重県レッドデータブック2015では絶滅(EX))にランクされている（三重県農林水産部みどり共生推進課2015）。県内でのバイカモの情報は長らく得られていなかったが、2016年6月10日に三重郡菰野町内の小川にて生育を確認したので報告する。



写真1 菰野町に生育するバイカモ. 2016年6月14日(市川正人氏・撮影)

この小川へは5年ほど前より定期的にクレソン摘みに訪れていたが、水面に上がった白い花が目に入り、はじめて足元の水草がバイカモであるということに気がついた(写真1)。バイカモといえば滋賀県米原市の醒井まで花見に行ったことがある。今回の発見はまさに灯台下暗しである。小川は近隣田畑に水を引く水路となっており、春から夏には定期的に住民により川さらいが行われる。そのため、繁茂するクレソンとともにバイカモも取り払われるが、また時間とともに涼しそうに水中を漂う姿が見られるようになる。この手入れにより、強力な繁殖力を持つクレソンに負けずにいられるのかもしれない。身近な場所で思わぬ発見をし、改めて自然の奥深さ、野あそびの楽しさを感じた瞬間であった。

今回の報告にあたり、種の同定、標本・報告文作成などで市川正人氏に大変お世話になりました。ここに感謝を申し上げます。なお、標本については三重県総合博物館と大阪市立自然史博物館に寄贈する予定です。

〈ますだ ちほ：三重県民の森 菰野町千草7181-3〉

松阪市の庄古墳でキクガシラコウモリを確認

富 田 靖 男

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumeguinum* は日本各地の自然洞穴や、隧道、暗渠、古墳、防空壕跡などの人工洞に広く生息する、最も代表的な洞穴性のコウモリです。松阪市の文化財に指定されている「庄古墳」においてもこのたび確認されたので、分布情報の一つとして報告します。

確認場所：松阪市庄町 庄古墳（俗に「こうもり穴古墳」とも呼ばれる）の内部

環境省メッシュコードおよび標高：5136-6400 約80m

確認年月日：2016年8月31日

確認個体数：成獣3頭目視による確認

〈とみだ やすお：松阪市川井町822〉

冬のカイツブリの食事

上 田 利 彦

2017年1月7日に亀山市菅内町の田んぼ周辺を車中から覗いていたところ、幅4mほどの農業用排水路に繁茂したヨシの根元で何かが水面を揺らしているのに気がつきました。車を止めて注視していると小ぶりのカイツブリがヨシの隙間に見え隠れしていました(写真-1)。やがて、体の半分が見えるように出現したそのくちばしには大きめのヌマガエルを啜っていました(写真-2)。すでに、この時点でヌマガエルは白い舌をペロッと出してぐったりしていました。

通常、カイツブリはこちらの姿に気がつくチャブんと潜り、やがてこちらから離れた位置にポカンと浮かび上がり、しばらくして再び潜るとさらに遠いところへと、徐々に離れていくものです。しかし、このカイツブリは一向にお構いなし！という風でその場でしばらくバタバタした後、潜水はしたものの数メートル先のヨシの根元にまたうかびあがりました。そして相変わらずこちらを気にすることなく、また先ほどと同じように水面を揺らしています。

さらに、その場でしばらく獲物を振り回し、いったん放して啜え直したりと、まるでカエルを洗うかのような動作を繰り返し、やがて再び潜水して元いた場所に戻りました。同じ動作を3度繰り返したのち、観察を始めてから約4分後、やっとカエルを頭から飲み込みました(写真-3)。飲み込んだ後もしっかり胃袋まで獲物が到達するまでの間でしょうか、しばらく水面に浮かび首を伸ばしたり引っ込めたりした後(写真-4)、ようやく潜水してこちらから見えないところ～おそらく向こうからは見えている場所～に移動していきました。

いつもなら人の姿を見たらすぐに逃げるところなのでしょうが、餌の少ないこの時期なので、まずはせっかく捕った獲物をしっかりと腹に収めることの方が先決だったのでしょう。くちばしが黄色いことや頸部の色合いや大きさから判断するとまだ若い個体だったようで、警戒心が薄かったのかもしれない。水路が狭かったこともあり、ゆっくりと食事風景を楽しませてもらいました。

カイツブリも、以前はあちこちのため池で普通に見ることができましたが、最近はため池環境の悪化や池そのものの減少などにより、なかなかお目にかかれなくなってしまうような気がします。

写真 1；ヨシの根本から出現。2；くちばしに啜えたまま移動。3；ようやく頭から…。4；ようやくおなかに納めていづく！



〈うえだ としひこ：津市久居一色町〉

サカツラガン 三重県初記録！

今堀聖史

サカツラガン *Anser cygnoides* はカモ目カモ科に属し、日本には冬鳥として渡来しますが、数は多くありません。名前（酒面雁）のように頬や喉がうっすらと酒気を帯びたような色に見える鳥です。鳥類は警戒して上空を見ると顔を少し上に傾けますが、この時に頬に光が当たると酒面雁と名付けたのが納得できます。きっと鳥好きな人たちが酒を酌み交わして名付けたのだらうと想像しています。

紀元前に家禽化されたといわれるシナガチョウの原種とされ（阿部・叶内2008；野鳥の名前，山と溪谷社），ガン類で最も大きく体長は約90cmと観察しやすい鳥です。しかし，全国的に決まった渡来地がなく，1～数羽がときどき見られる程度です。隣の滋賀県では，2009，2010，2013，2016年にオオヒシクイやコハクチョウの群に1羽が混じっているのを観察されていますが（ウェブ情報，www.youtube.com/watch?v=KKLWGqFTJM 他），三重県内で観察された記録はありませんでした。今冬，三重県初記録となるサカツラガンの渡来が確認されましたので報告します。

熊野市在住の中井節二さんが，定点観察地の一つである尾呂志川河口（御浜町阿田和）で2016年11月30日午前9時半頃に2羽のサカツラガンを見つけて30分ほど観察しました。以前に県外でこの鳥を観察したことがあったので直ぐ識別でき，その後は周辺の餌場やねぐらを探って5回観察しています。最終確認は12月19日だったそうですので，御浜町阿田和周辺に約20日間滞在していたこととなります。

12月3日に友人と共に中井さんに現地を案内してもらいました。到着して間もなく尾呂志川の河口に近い河原で羽繕いしていた2羽のサカツラガンが，真上のJR鉄橋を通過した列車の轟音で飛び立ち，川に沿って海の方へ飛び去りました。「また戻ってきますよ」と言いながら中井さんは河口に近いポイントへ案内してくれましたが，2羽の姿はありませんでした。餌場と海岸の二手に分かれて探していたとき，海岸から150～200m沖で2羽が海面にいるのを友人が発見し，洋上で羽繕いしているのがスコープで観察できました。

餌場には約40分後に現れ，ゆっくり旋回して田に降り立ち，周囲の安全を確かめて採餌し始めました（写真1）。印象に残ったのは，同時に採餌することもあります，2羽が交互に採餌して1羽は周囲に目配りしている時間が多かったこと，また，餌を採るときの嘴を見ていると，落穂だけでなくロ



写真1 サカツラガン（御浜町阿田和，2016年12月3日）

ゼット状の草をちぎっているのか，稲の切株付近の小さな生き物を捕らえているようにも見え，蒔田にある食べられる物を大量に食べていたことです。大きな体を維持する餌場探しは死活問題ですから，渡来してその場所に降り立つかどうかの判断をどのようにしているのでしょうか。小鳥やカモ類は毎年同じ場所へ来る個体もあるようですが，不定期に渡来する鳥は気ままに場所を選んでいるのでしょうか？サカツラガンを観察しているといろいろな興味が湧いてきました。

最後になりましたが，渡来情報の提供，現地の案内をしていただいたうえ，報告について許諾された中井節二さんに深謝いたします。

〈いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30〉

走った！みつけた！痛めた！

清水善吉

去年の今頃、メタボ判定をいただきました。晴れて国認定の不健康体になったわけで、それ降圧剤だ、利尿薬だの、水族館の魚よろしく「薬漬」にされて国家財政を圧迫するのが必至の情勢でしたので、走ることを決意しました。今更何を！お前はもともと勝手に走っているじゃないか、とかツっ込みを入れないでください。私を知る人には信じられないでしょうが、本当に自分の足で走ったのです。

さて、コースです。自宅近くには運動公園もありますが、ジョギング中の女性に刺激を受けて違う方向に走ってしまっても困りますので、人と会うことの少ない農道・林道ルートにしました。自宅から水田地帯を抜けて山裾の農道を通り、県道を少し上ってそのまま観音山中腹の林道に入ってふたたび農道に出て戻ってくる8.5kmのコースです。

初日は100mも走ることができず、さすが認定不健康体と納得しましたが、1週間もすると体が慣れてきて走ると気持ちが悪くなってきました。こうなると一種の薬漬状態、ドーパミン中毒で、都合で走れない日があると落ち着かなくなってきました。

走るのも楽しくなってきましたが、もっとわくわくしたのが、いろいろな生きものたちに出会えることでした。せっかくの一期一会ですので、記録として残しておきたいと思います。場所はいずれも「松阪市伊勢寺町」、確認年は「2016年」です。

両棲類：アカハライモリ轢死体4/28（県道568・自動車道西）、タゴガエル鳴き声4/26・28（林道・横滝寺北）。爬虫類：ニホンカナヘビ目撃4/5（林道・横滝寺北）、アオダイショウ亜成体目撃6/6（県道568・自動車道西）、ヒバカリ亜成体目撃5/12（県道568・瑞巖寺南）・同5/18（農道・県道568南）・同成体6/8（農道・県道45南）、ヤマカガシ轢死体4/5（林道・瑞巖寺南）、ニホンマムシ亜成体目撃6/6（林道・瑞巖寺南）・同成体7/3（農道・県道45南）。哺乳類：アカネズミ死体4/5（農道・県道45北）、カヤネズミ3子6/8・同4子6/9（農道・県道59西）。

アカネズミはポケットに入れて走り、持ち帰って標本にしました。カヤネズミは6月8日に農道でウロウロしている子を3匹見つけ、車に轢かれないように農道脇の麦畑に移しました。ところが、次の日にも1匹が同じ場所でしたので麦畑に入れてから付近を探してみると、なんと2匹は道路で轢死体、1匹が水路で溺死体となっていました（写真）。農道の反対側の麦畑が収穫されていたので、親とはぐれてしまったのでしょう。

肝心の走った成果ですが、ふた月半ほどで10kg近く痩せてしまい、家人には貧弱と不評でした。この評価は今更ですが、困ったのは膝を痛めてしまったことです。メタボよりも、こちらの方が私には死活問題ですので、走るのは止めました。今は、なるべく車は使わずに、気分転換も兼ねて自転車に乗るようにしています。リバウンドは、まだないです。



写真 左；農道で途方にくれるカヤネズミの子，中；同，轢死体，右；水路内の溺死体。2016年9月9日

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町 1386 - 17〉

ヒメシロハラミズナギドリを三重県初記録

ヒメシロハラミズナギドリ *Pterodroma longirostris* はミズナギドリ目ミズナギドリ科に属し、本州、四国、沖縄で散発的に確認されている（日本鳥学会2012；日本鳥類目録改訂第7版）。三重県内における確認は報告されていないが、紀北町において入手したミズナギドリ類の死体が本種と判明したので報告する。

後に紀伊半島大水害と命名され、県内にも大きな被害をもたらした台風12号が接近しつつあった2011年9月3日、紀北町東長島呼崎（よびざき）地区の民家の軒下でミズナギドリ類の死体が発見され、住人から連絡を受けた堀内が回収した。当民家は海岸線から500mほど内陸部に位置し、台風が上陸する2日前のことである。

死体は詳細な種名が不明のまま清水が冷凍庫で保管していたが（写真1）、庫内整理のためほかの鳥体とともに（公財）山階鳥類研究所（千葉県我孫子市）に寄贈し、あわせて同定依頼をしたところ、本種との回答があった。同研究所において剥製標本として保管される予定である。



写真1 冷凍標本の背面（左）と腹面

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17・堀内 弘：紀北町長島2067-62〉

会員の本

続・ムシの考古学 森 勇一・著

A5版、231頁 2016年12月 雄山閣 定価（2600円＋税）

「歴史の転換点にムシがいた」ことを示すために書かれた本。大正・明治時代から旧石器時代・地質時代までの数々の歴史的な事件について、全国の遺跡から出土したムシたちの視点から読み解いています。ムシたちは事実のみを語ります。ムシ好き、自然好きはもちろん、従来の歴史書に懐疑的な人にもお勧めしたい一冊。本会会員に限り1ヶ月間限定（4月末まで）、著者特別割引価格2,200円（税・送料込み）で販売。2冊以上ご希望の場合は送料が有料になりますので担当者に確認してください。問い合わせ・購入希望は雄山閣営業部の「平林様」まで、
mail: contact@yuzankaku.co.jp TEL: 03-3262-3231 FAX: 03-3262-6938



訂正とお詫び

自然誌だより110号3頁の
写真4キャプション

誤 睡眠中のカワセミ



正 睡眠中のカワガラス

お詫びするとともに、
ご指摘をいただいた
西川完途会員に感謝
します。

編集後記

篠木さんのハマボウの記事を読んで、わが家の庭で育っているハマボウの実生苗数十本のことを思いました。狭い庭でそのまま成長させるわけにもいかず、もらい手もないなかで、ココだ！とひらめきましたが、ダメかな？引き続きもらってくれる人を探しています。次号は6月発行予定、ご投稿をお待ちしています（善）。

自然誌だより111号

発行日 2017年3月27日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp